

幼 児 と 語 る 心

大 塚 喜 一

子供と共に、おはなしを樂んでゐる時、ガタンと戸が開いて人が入つて來た。この際、話者自身の心の動きが最も戒心せらるべきである。ハッ！とした途端、焦慮、不安等が自分の心を亂し曇らせては、もとの平靜な状態に復歸するまでに時間と精力とを空費せることになる。その爲におはなしの場が、そして子供達が亂される道理が判れば、話者はいつ如何なる場合にも、子供達と自分との心の交流の中にしつかり生きることを第一義として心がくべきである。そこにこそ「子供と語る」話者の心の世界が成立する。この世界に住む我は、話を聴く子の心と合體して、彼我を一つの線に結ぶおはなしの純一無雜の統一態度に一貫出來る。それは、子供と交る我の錬成の道場であ

るとともに、子供を信ずる我の安任の聖地である。智情意未分の具體生活をしてゐる幼児期の教育は、對象たる幼児自身の生活態度を基本とするものであるから、おはなしに於ても、聴く子の心の動きに應じて共に語るところに特色があり、智的教材として外より與えらるゝ年長児の場合に比し、どこまでも對象に即する態度を以て、聴く子の心を受けて語るのだけければならぬ。こゝにおはなしは幼児との交りに於てのみ成立するものである事の眞理が、話者たる自分に必然に感得せしめられ來る。

幼児断はことばが單純なだけ、一語の表現の適否も、それが全體に對する効果が大きい。すなはち、一語一語をゆたかに、ふくよかに、一ばい心の味をこめて、語るによつてのみ、眞に清純な生氣をおはなしに充たしめることが出来る。だから、おはなし全體の統一のうちに自己を正しくはたらかせてゐる話者は、その發する一語々々がおはなしの底流をなす自他一如の泉から滾々と流れ出るわけで、かゝる純な表現にこそ、眞に幼児と共に語る幼児断の佳境が顯現するのである。この際話者は、おはなしの場面を今聴いてゐるあの子この子に靜觀しながら、その靜から動への今の呼吸——生命の流れ——にピッタリあつて語つて行くのであつて、かくして、聴く子と語る我との間に流れる生命の創成が、現に進行しつゝあるおはなしに刻々と具現されて行くには、その話材が發度もくりかえされて幼児と語る眞體驗で成されてゐることを要する。又、かゝる洗練の道程を経て漸次に熟しゆく交りの線に副うてのみ、話者の修行の深さが現出される。かくて又、おはなしが、幼児の魂を守り育ててゆく地上の天國の妙音として成就せられるのである。(二三・四・一六)